繪本烈戰功記

十

2257
10

池清

帝国図書館蔵
ヘ 13
2257
10

繪本烈戰功記巻之十

目録

上州石倉砦合戰之事
武田家諸士縁組之事
芋田掃部助武田家使者之図
小幡又兵衛忠勇之事
山縣昌景雜儀之事
加當段藏見奇特図
飛加嘗行幻術事

194

飛加當欲刺縁信事

縁信大勇之図

上杉右倉若合戦之事

文天道盈ヒ虧人道亦盈ヒ悪し理何不知べ。雖貴族分と全事不能。永禄八年又月廿二日。京都より上杉弾正大弼長尾景虎上洛。細川兵部大輔晴元中勢ヲ補佐宜の為家より。就後國春日山の城主上杉輝虎入道縁信へ。飛札至来ス。縁信拙ヲ抜ん為ふ。当月十九日三好義賢。并ヲ三好家の臣松永弾正ヲ殺害。絶同筑前守義賢久秀。岩成主税助等。逆意ヲ企て信ヲ市館へ押寄。義輝公弑〜奉り早ぬ。先ヲ後く京所及び畿内騒動ヒ兵革一時ヲ起ス。当世代ヒ山林溪谷ヲ分て隠れ洛中洛外國清の街と成

敵対。甚ふ白進ての事ありけふ。謙信数日歎息有て
曰。されば。先年上洛して。義輝公ふ見し時。細川晴元
を。三好松永等ふ。忠心を尽すべうなんと。密ふ密ふ
頼りをされ。其外諸国の大名ひいでて。逆乱の好徒乃ふ
対せしまゝ。いくばくさよとて。屢傷あり。ちるぞ
筋なく。備後を召集て。都の大変ふ中。きうを。備前国へ
曰。今。遠西筋三好の一党。及び。麾下の逆徒ども。何事のあの
徒代をぐき中。各が知存を聞んと。大音ふ云されど。若臣ふ
只畏而已にて。一云答る者すけなし。未だ狂ひ関所ふ
されてぞ。ありける。謙信再数を発し。当時日本ふ名る
者多とりなれども。此逆徒を徒せん者共。三人ある。其一ハ甲斐
の武田入道信玄。備前ハ謙信。越後ハ上杉。三人程
而里所隔ぬまゝ。自越迎引よ及び。甚同隣国京都の備将軍
向て戦うんぞれども。三好松永ふ好勇ふ乃ぶ。ぞれまで
只尾張の小名進で見を付ぶ。然ば武勇彼よ後きん敵よ
一日も早く上洛す。速よ逆徒ふ屠り。義名ふ天下ふ惠
うさんと。解嘆されれば。備士数で承り。心中勇ふ
てぞ退きける。まよりして謙信ふ上洛の準備あり。先備前へ
用者をいを。弓勢他を。
左近の用者立ふて告て曰。武田信玄ハ頃越中表へ発向
あり。故よ国中良武威と失ていとゆうれば。謙信時得うり。ハ
同よこそ上洛を斬所。上洛の途ふ啓めて。直よ海船あり て

二萬餘騎を引率し。六月下旬春日山を發して。武田の領する処の。上杉石倉の砦へと押よせける。抑此砦と云は信玄先年箕輪を攻られし時。厩橋の城の押として刀根乃邊なる石倉といふ所に砦を築き。大戸丹後。長根曾根等。いづれも手練の者を籠置たりける。然るに謙信の二萬餘騎俄に押よせ砦をとりまき十重廿重に取圍み。息をもつがせず攻たてければ勇士共必死となりて防ぐといへども。元より要害ならざる砦なれば遂に防戦術盡て。大戸丹後。長根曾根を始め。惣勢夜中に砦を開き。箕輪の城へと落行しかば。謙信一時に砦を乗取。小條丹後が甥荒尾甚六といへる大剛の者をとゞめ押へ役として春日山へぞ凱陣ある。此時箕輪より武田家に告ける

196

急なり。信玄越中にありて是を聞。大に憤り。彼にある小僧の挙動なる吾留主を考て上杉に働こそ奇怪なれ。いで一揉に追まくらんとて。速に越中を出立。上杉へ押通て。彼石倉に押よせ。砦を一時に攻落して。荒尾甚六を始め。一千余人を斬ちらして。和田兵衛をいれおかれ。同七月下旬甲府へぞ凱陣ある。實に龍吟ずれば虎嘯。両将の武勇互角にして神出鬼没間に髪をいれずとて。諸人舌を巻ける也とぞ

○武田家諸士縁組之事

武田晴信入道信玄。隣國に出馬有て。飛騨越中両國を切従へ。剰上杉石倉の砦を取返し。夫より甲館に帰られて。旗下士卒の労を休らる。茲に先年大熊備前が妻に送られたる女房

小宰相より。一通の書をぞ送りける。信玄披見あれば。武田家の勇士ども。或は病死して。右續あれば家の緣辺と宣ふぞ有る。信玄感心斜絶なりと。絶慶をぞ起す。聖賢の教國家長久の[illegible]ひなりと有て速に許宿所以。猶婚姻の取組をぞ定らる。先信玄の先方。望月が妹女を以て古典厩信繁の[illegible]男未十四才なれば。おとなきを嫁せしめて。望月の名跡とぞ。望月右近太夫義勝と号らせ。六百騎の大將とぞ。信玄の九郎三左衛門とて。三十騎の將に成。場英法守依房が聟と成。板垣左衛門尉と。安中左近が聟と成。相木市良兵衛が一子成。山縣三郎兵衛が兩女をぞ娶せ。先年上杉義輪が約長弟が子孫にぞ死せる。栗原長三郎が後家を。耳利左衛門尉が嫡子。三郎次良が妻女小作性なる。新忠臣の家を相續せさせ。主恩緣を加らきなれば。各実の恵を拜謝し。上下和順[illegible]忠勤をぞ勵ける。茲に法名岐阜の城主上総助は。智勇を兼し大將と而。四海一統の大功を望る。越後長尾山の城主。上杉輝虎入道謙信。甲斐原氏の末裔武田晴信入道信玄。各は遠鄙より。威を海内に震ひ猛勇宛も文武の大將。仕々妨と成るべし。茲に上総助が家の子。小多掃部助と云が甲府より。十一年が間武田家に勤仕する。の使者と。甲府にぞ送られける。掃部助命をうけて。武田

198

199

家に至り申入る様ハ。上総助事近年法名衣を出退治せしめ牟。然バ武田の法領分。信玄木曽に在れ陳ぼれてはひぬれバ民百姓ハ中にすゝぜバ。牛馬の往来近世もくに任政存升伊奈四郎勝頼殿へ。上総助が如女を進じ永く父子の睦を結びなゆくども。上総助渐く三十二才にて渐く二十七才に及びなく四郎殿へ遣べき女子なく。本意を失ハれし処。法名苗木の城主遠山勘太郎ハ妹聟なるん。其遠山が娘を幼少より上総助養子と定しが。容色うるハしく候へば。是を四郎殿へ進じ申さば。此儀相済候ハゞ。上総助及一門の悦び是に過ざるべし。継を憑して述られば。信玄も其子なる情熱を。喜びの影近望有てられバ。心中満足して。伊宿の五答に及びしかバ上総助大に悦び。永禄八年霜月十三日。小笠家より。伊奈の方遠へ輿入五くめでたく婚礼のむしくバ。武田小幡の両家。水魚乃ちぎりをぞ結ぶのある。係るがくこれ小栗家の御子縁せとなりえし。其後此輿入ありし方乃腹に一子を産れ是を太郎信勝と号て。武田家廿八代の主将なり

小幡又兵衛忠勇之事

信玄海津の城二の曲輪に左知の小幡又兵衛尉ハ。若年よりと武も数度乃武功あるれし。殊に川中島の勇猟ようしても其名隣国までひゞきしかバ。信玄大に感ぜられて。永禄八年十二月廿日小幡又兵衛尉を甲館に召き。跡部大炊介。長坂左衛門入道を以仰出されるハ。汝が父小幡虎盛年来。武勇世に聞ふれたる

大別の者にて。殊に平文入の日降より二代の忠臣あれば伝云
阪心乃おりいを。就後の鎌倉より〻別敬の押にて海はの
二の曲輪に住居する板部弥正が仁副とす。其上伝云の士系城
次郎お捕。海弥中勢亟とて。右功の者を虎盛が聟と為し。又
川中侍住居の原与左衛門尉市川入道梅市が一子。平左衛門尉
是等衣人い尚家侍代の者なる史。是も虎盛が聟とする也。
全軍紀正記に木の異に人伝。依されなれの為なり。虎盛
去る永禄四年の夏病死す。其子武勇に優れ又虎盛ふ也
らべと笑い。故ふ今般信州の緑者ども。故入道虎盛がぶく
男の男ひと臣て。備中係の下知に去ごいせるべ。海はの言板
がよれたとけり。川中侍い殊に大切の場用あれば。又虎盛が

如に。上に二の曲輪を住とる同。よくく守禦あるべ。処領も
同心も。さて潜を作ら〻作ら〻されれば。又兵衛尉
数而永。作遠背仕そい申くりくゞも。又兵衛尉
出ぎりまを拙くるり中も。出馬前乃
働所後横仕いで。生涯の面目りとし。海津の二の曲輪城守
鎌信所おさん居いても。就後より尚方へ軍を出され時い
徒ふ安然として。日を送りい而也。さりて。又兵衛尉
意ようんのり仕ぐいる。何卒海津立様の様い案を
も出貞所蒙りくいと。思ひ切く別ひきべ。信玄様
らば後来の処領。元上るうと。作きれば。又兵衛尉真後い
兼而笑い悔仕ふて。不領うん些も望ふくい間。只い何近も

市蔵卒へ加へあらり。偽自由よせざせめそるこそ。又兵庫尉
本意とそらること。再別ひきれで。信玄大よ怒らせられ。其
方。祖父日向守よりの恩義ハ四ひ。若年たきやるも。又鹿盛がまて
に。威勢を恐みてきんどして。彰まで。よ公ハ孫て者人手
意ハ宵の条。奇怪至極なり。其罪軽うらず。切腹申付る
ありと。作按く。御中立て奥へ入せらきれで。又玄庫尉
些も勃ぜず。家令畏京と。市蔵とやて。速よ館ハ退ぞれ
菩提所。宍山小路の妙青寺へ。腹うき切んどして。宿廻へを
くらたぞ。たぞせるよ打跨り。妙青ちくと。ぞせ行きる。代ハ信玄
の小姓。土屋平八郎。奥よ入く。伝玄の弟よ勝行して。日向上意
こそいらるも。あらら。勇士とらしひい。何とも情き事よ。

いくハ何卒ハ小市あ者を行りたくいて。四ひ。ぞんぐ別ひ行行
ト按て。市蔵を退とそ。ちとひ引せて。ちくとまて。ぞ
尉ハ行ハ。退一緒かくて妙青ちくと。独行きる。伊奈四郎
勝頼も。打らら立府らそあらきを。見と聞り。安部又良左
衛門尉ハ令ど。急ぎ又兵庫を止めよとて出りり。先信玄ハ
怒をうんと。勝頼ハ館へ出らる。勝頼ハ邸より宍山の妙青ち
へら程近くありきれハ。又良左衛門ハ附よりきれで。
小幡又兵庫尉屋上よ走とと。己よ切腹あらんと。柄よ手ハ
ぬく。土屋平八郎。打ぐ。ぞ。止めあるぞ。れハ
安部又良左衛門も。るより。勝頼ハ意行ハ。
制し。止めて。遂よ土屋ハ邸へ。休ひ。勝頼ハ又館よ

信玄は聞えて。又兵衛が罷れ帰こと強られ申きば。信玄も勝頼の
ことひ。流石は武功を
あらぬとて。逢まいりて。切腹をゆるされ。又兵衛
ぶく。猿本組は加られ。原領七百貫と猪る三騎足軽十人と
附られて。残の原領は姫岡に原ハ。
叔父小幡弥左衛門は加まろう。山城守はあて。海津の二の曲輪の
ぞこ。あまきの原領は附まろの足軽まで
ばめて。猿本組は加り。大は本意を得て。今はもあれ軍陣ふ
向ぞ。思ふまふ働んぞと。雀躍してぞ居ろう。平左衛門のまい
頼まれる事なりと。皆人感じあへる中ぞ

山縣昌景雑儀之事

宿老

笹子山縣三郎兵衛尉昌景が同心に小地又郎左衛門と云ふ者あり
伊勢の國の牢人にて。頗武勇の誉有りのあるが甲府に仕へ
より。知行十六貫領にて。あるに知行西き場所なりて。弟と
笹子に及びきれば。組頭に成る山縣三良兵衛へ然弥敬交り
及びられども。山縣の給人大場民部左衛門小地と仇敵の者と
どりて。中途にて是を押。小地が弥書を。一文も山縣に通ぜざり
きれば。小地又良左衛門大りに温り。今は窮而西働んよりて
自害して死べきぞと。信玄公三宝まに心産をかりわれ。又書を示
と遣して。切腹為とーなるを。伝左られ所へ此けてれ。
宿
ぞ宿ぢきれども。小地ときを聞きして抑伝玄の武徳を聞ひて。他公
よりまさと望て来る者いくぞ孫ど。甲斐と去て他国よりなと

求者臣。然は此家を出るほどなれば。武士たるに於て傷きなき事
ならざる故なりと批判せらるゝは必定なり。されバとて。此侭にすまんも
生涯窮鬼に勝されん。如ば。自害なさんと意を定めんとて肌押
ぬぎたるを。信玄又さへけれども。小地の曰武士たる者の
一旦切腹と言出し。書置までなしたる儀。むざく止るべきにあらずと
所ばとて。經刀を抜放て。突立んとなるを人々かうして押止
きるほどに。腹きりかゝりて。是非なく膝の太咲どもあるを
十二三刀突て。三日を經てぞ死たりける。山縣三良兵衛彩く
より大に驚き。同附横田より申上ざる先まとて。早々に言上
也されば。信玄殊の外立腹なして。從政の山縣三良兵衛事
己に改易と作出されたるに。山縣迷惑申す事。則原隼人佐三

203

枝勘解由左衛門。曾根与市助三人の名前にて。熊野牛王の裏
に誓紙をなして。小地が赦が努く存ぜざる旨なれば申上ければ。信玄
則聞ふけらるまで。なほだ先祢弘を頼まれける。山縣が内の者
大場民部左衛門城守と為て。右三人衆の原蔵根三枚をぞ
流る。あり将長坂長閑跡部大炊に同附荒二人横田荒二人共に添えし
らまて乳聞あり。猶一はもく胡乱に因われ岩間大蔵左衛門を
召ておゐげよりこれ有礎臣と為実に厳重なる詮議ありて山縣
よりが上なる如何まての以も。大場無念よりして。山縣に申聞せざるに
身て此のごとく始末なることに叶はりければ。山縣の改易衛れ
然ありて。大場民部左衛門の一類ことごとく成敗にぞ行はれける
山縣三郎兵衛奉公中ならぬ新ぞろ迷惑する事は無りとや

然るに信玄作出されなるに、彼信玄が言出を集、各を思ふに非ず
只信玄が身をそなへ、ふ細い小地の如き兵を、幸く集り、多く勝の師を
勝んが為せ軍に勝の図をひらめんといふ事也。図を取りなめ、こそ面く
大小中作よ。加恩をなれて抜ださあ。又所領所取。千上武功を見て
憎知行を取立多きるに侍の本意なり。千本意の本こそ
偖付。大小中作去。中間小去よ。ある近も。彼の為ひ忠
義所懐毋うよ。見大形第一の事也。故云ハ日月の光の如く光
何きう私よ照しのみ。ぐ私平。私なれと日倫。テ利支天と号奉。弓矢
の法神ときま。後ときと。己よ軍配団扇を表。神体とあり。己の
私なれ毋うとの事なり。向後い仕いやよ及ぶ。たくよ。近神を中ぶ
私なく告来ると。近習衆人よ金子九両とらせ。小地よ良左衛門と

義さる清白寺とらくるべきへされて。永代小地がわと所吊ハせくきるとぞ

花加嘗行三幻術二事

茲よ伊賀の国乃住人加茂除茂といくる者。自恵術の名人なりと名
乗て。越府小来り。其ふとり所求て。上杉家よ仕官とぞのぞ
さる。此者品玉なる妙を得く。能人の用所ありうせなを
ば。諸人ぬきしく賞したくさるほどよ。皆而白き事よ思ひ
て。一日扇崎知泉守が邸よぞ招きるる。加茂ハ極この術所
仕しして。品玉をあやどりさるが。千絶よ至て。其足の大牛
を座上よ引出して曰。今日のよ術見て仕業いるれも
能く市徒ひへ。只今此牛所呑いるりとて。牛の頭よ口を寄
るとええ。さしも大なる牛を。脇より尾へうけてぶ

205

ぐと呑くらんれば。一座の諸士いづれも初めどびえ。
一同は膽を消。仕くりやくと声をあげてぞ嘆くりける
時ふ侍の松の梢は契の有りあり曰。只今牛と呑たる虚と
有ぞ。品玉い牛は脇は茶屋ぞや。人々よく此眼を開て此
繞せよとて。ぼくる契のうちより。不測や今迄呑ざる牛
忽然とあらはれ出。加茂陸義を脇は茶屋をうりれば
こんあ再契をあぎて。いしくもこんあらハしくりや。阿波で安
やと。一同はまを振てまひたり。彼は平ひらんと。仰ぎまん
まば。検傍が中間八助といくる者ぶざとくも樹とふ登り居
て。竊は此程をこんあいしくるうり。加茂陸義大は慍り
ぶくくば。今一刺絶しいる。すくく看けゆくやとて。猶成

屹と睨ぢく。懐中より何ぞあらん程を元半て。庭とは蔚
けまば。忽菱草生ちぐ。二葉くりて。衝くは蔓をびくりて。くる
る松根は葉りくり。生くれは遠ちる所。陸義扇ふと現と宛き
てさも徐やくはあつぐくまば。白きくぐの花咲出くり。霜
所舎くるさ陸。さるぐく植根の雪中まぐひて。葉しれ年限
ふ〜。兎角とるちは。一つの實生ちれば。人々皆其は驚
先い格別は面白き年ありとて。諸士方うあり。皆を頂
然てくんもあり。猶先小立出く。嘆るありて。おれ葉の花や
實年。年生は此陸義。〜あぐ〜。ぼくふ嘆ドて止ぐくるふ
加茂陸義此驚所ぐくく。歩嘆ぢく。扇をくれ。早くあ
ぎけまば。ぢ實。忽二尺ぢうりぐ成ちん。高下陸義

小刀を抜出して。兎ある方に向て慇懃に述て曰。備中亀新も斬ざらうにあたりはゆくども。吉川が垣根の産なればゆくが。各宮る者の法がみふれぬべき物もはしば然まが世に益のあるにてあれば。只今切捨らるべし。夕顔は世のあらゆるそはゆくが一入法心をとゞめまて法を伝せさせぬくと云は文字葉を吻と切放とこえあるが。樹上にて兎居る八助が首。四口ころと落下りて。胴は猶まぞ残りけるを。兎おいよく感じて実に奇特のことの哉とて。暫時のあるも止ざりけるが。やがてほどなく年館へも聞えけまが。謙信も奇特を試んとて新発田道寿軒に命じて加留と召寄られければ。隠者あり青を持参。郎中にて新発田ゟ従て館まぞ勝行しける。謙信遥にうんありて仰ありけるは品玉の儀

207

た婦女子の眼を驚さればこそ。更に論ずべきことにも非ずど。忍術に於ては取用ゆべき事もあらん歟。汝の得たる所の術聞んとありければ。加留謹で曰。法眼の通り。品玉の儀は云上ぐるべき程の事にあらず。忍術の儀。諸国に名ある者も候へども。未だ某に及ぶ者有とも覚へず。先手に一尺の剣なく持ずとも。いかなる高塀深堀ありとも。飛越て城中へ忍び入故に。某が異名を飛加当と唱ふ。然ば此上に威勢を附て給らんに於ては。要害堅固の名城に籠り。士卒充満して守るとも。忍び入て敵将の首級引提ん事。掌を反すよりも易けれと。言ふ事広言なり。其広言尊慮に叶ひ。謙信微笑て曰。さらば試に今奇特を顕し見よかし。今宵直江山城が邸に行て帳内に

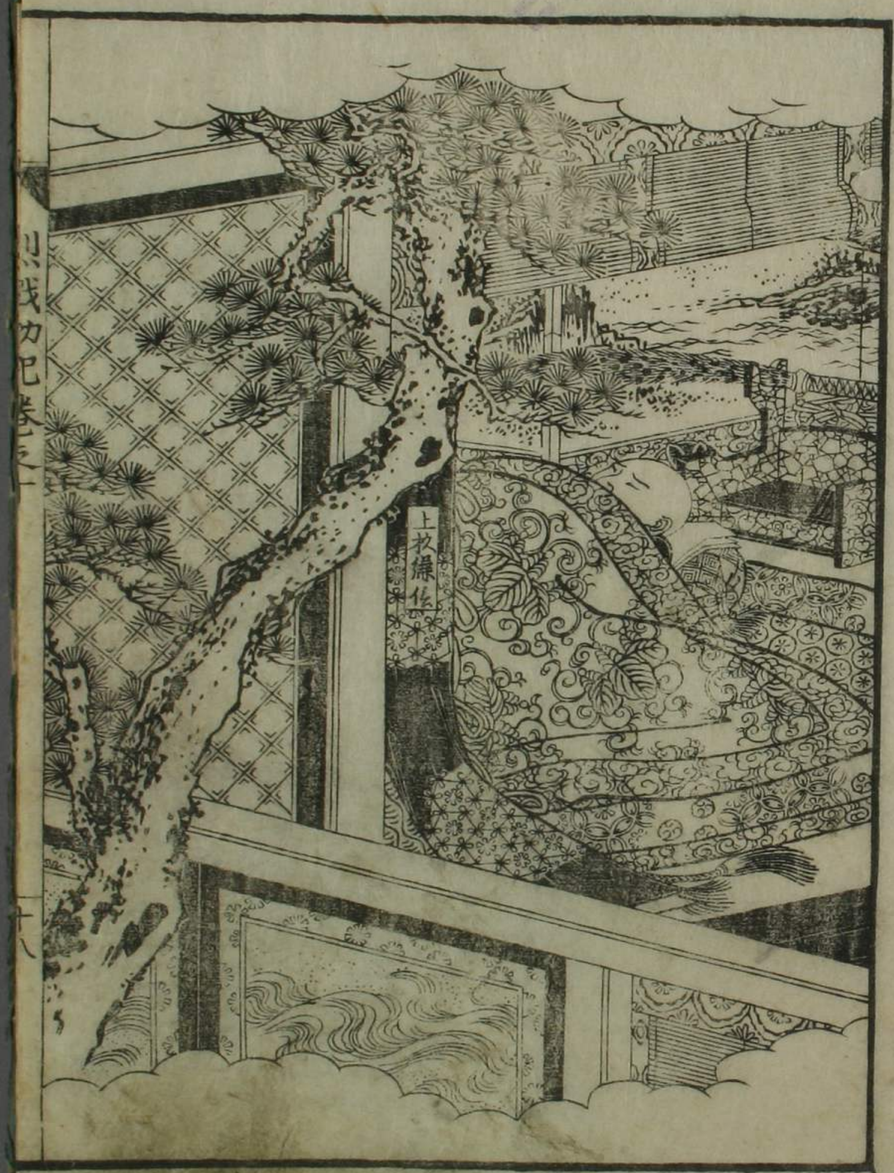
かたりある所の長刀を取来まよ狂乱外よも乱れ出のるべ
人のもとへざるもふ。あしてもるべしと今ぜられ守れば加賀平
伏して乱れ。則館をと膝退する。謙信密よ立江藤信を
委細城中含めらる。山城守直よ郎へ飯り。家中よ厳重命
城中へ四方へ遠間ふく番兵を至間毎に燭と照
遣るに村雨と号遠雷のごとく放うる。山大異物城内
ち。頻よ乱妨。いうあるき猪狼うとも。辱ともせざる
宿大すり。そと究竟の兵士。たまくよ到着して。眼と死て守
それを。隆義翼をまじ。風ふ多とる柳ありとも。山夜
放い。思び入べ遠ゐもとうん
花加賀欲刺謙信二年

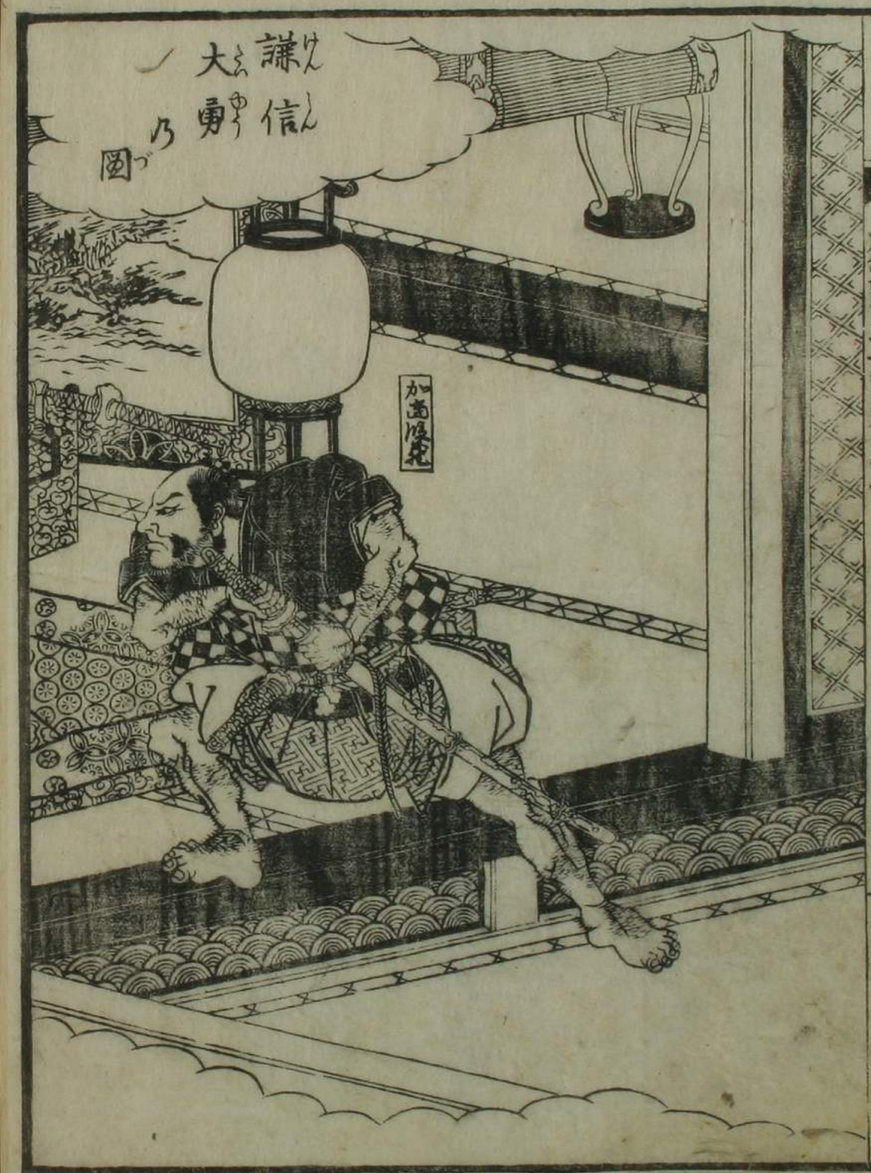
新雨其夜も更ふ。直ぐ番兵大い。今年来るる。瞬を
やで守り居るよ。玄冥の時分九ど箕ふ。當下異の城よ
隆義が姿髪髯と顕れた。須破こを曲者ごぞんうれ。花の
ちぶ手数さんと。遠丸刀うて立ひ。上下仏分一数はて
眼結ぞ居ふりる。隆義姫まうる気色もなく。良門内
刀ふ出ふふ。ふ出ふる。鉄ふり蹴飯ニ口ぐうして
投げ。きれを。彼遠あの村雨。かく吟ふとんに
ぞ。かちまち数死ぞ死ふ
あふん。秘文を唱る。隆義狂乱ふ
洗ふ。ふとして眠を催し。ぴ仏俗て熟睡ん。ふふ
見ふ口情と膝立ふを。佐藤中して睡魔を湧ふ

かくもきれば。陸義も入来給ぶ。立寄らるべしとて。
堀上よりなるが。時刻次第に。月農鳥啼。暁を告
ぐる寺院の鐘の聲ふ。はるかに。堀上ふ。あり。加南ゲ
姿。雲霧のごとくに消うせぬ。番兵各雷鳴。
の事。能ひ。して逃失ること。傳聞ぞ居ることふ。鎌
おのとも。鎌信ひもぐ寝ぶ。加常ゲ。青ぞ。待居
られるゲ。喫よ。と。陸義立ち。と云ふ。とるぞ。急ぎ出出
さまきれば則。直ぐ。帳。長刀。提。
直ぐ。妻の。侍近く。呼。使ふ女の童。呼。斧。負て。
。はるかい。当。ぶ。賜て。負ま。立。
加南ゲ。術。長。とると。喫せられて。襲。笑。て。金。若干。と

加まうされば。陸義。面目。て。退きる。鎌信
跡。て。鬼小僧弥太郎。を。召。て。曰。彼者。味方。ふ。あ。
意。宝。るゲ。事。もられど。相貌。悪く。頬骨。突。て。狼眼
の上。よ。狐。乱。れば。必。事。隠。て。約。を。逆。
招。時。意。を。変。速。裏。る者。也。然。ば。
て。見。虎。狼。を。畜。て。災。を。待。る。等。見。兵。の。
ら。ふ。ち。這。奴。他。国。ふ。走。殺。
命。ぜ。れ。た。鬼小僧。罪。て。加南ゲ。宿。知。
陸義。も。て。喫。ゲ。事。も。れ。逃。
弥太郎。ふ。く。と。云。上。れ。鎌信
さ。ぶ。と。れ。と。笑。て。居。れ。る。

210





加藤隠岐守。謙信程くの術をせしめ給へば。保親の仰法も及ばず。刺殺さんとあるを奇怪なれと大に怒り。山五郎を呼引捉て。他国への土産ふるべしと。一夜保親に及び。謙信の寝処へ忍びへ来る。亜宿の兵士。皆熟睡して座敷ふ伏せり。隠岐守。謙信を窺ふに。謙信衾ふ被りて寝られ。隠岐守。得こそ。能こそ。是をいかと分て震ひ。慌て。謙信を揺起さんとせしに。謙信。驚て起。うまと。謙信。茶屋も。ぞ。雷の。鼾の。勢。加藤が肝を微。そしてのくせもの。戦慄して。尻居て。唖と例きこそ。此者を近習の士。眼を覚ませ。ちんや。加藤隠岐。短刀を。抜て。作反て。例き居るうち。

川田宮千与。曲者有と呼ぶ。起うして。抜居ると。加藤。刎く。五しく。宮千与。跳起し。逃出んとするを。決て。亜宿の士。逃まも。なく。組付て。振ひ。きて。起ようとえんえんと。ぶくと。失ぬる。近習の士。座上に。近うけ。崩下に。走り。鎧。係に。強動に。謙信。狂れと。夢も。而寝られ。近習。近くと。寄て。言上。言上。聞て。狂起も。亜らば。ず。眼はして。斜ふんぬり。余。将に。謙信。甲冑の八道に。拭に。品玉。ぬに。首。が。ふべに。者に。ず。恐。術に。諸の。首を。獲ぶ。英雄。傑士の。素に。及ぶ。皆。修賀。元と。書。ぬに。ぞ。武。乃ハ。左。横に。あ。弱き。ことの。うれ。ざる。ふり。諸士。必。用。章を。る。事。あ。れと。ず。云。して。に。抜に。仕。再。鼾。雷

声の如し。近習良安堵の折ふしを忍せども。狂堅固なぞ寄りきる。然て加尚隠義いと扶の館外逃を。甲府よりて長坂武岡
よりを求て。武田家へまゐらん外のぞこうぶ。長岡も平寄牧ふ
威ぞる事あり。程こと執しきれば。信玄遠よ隠義外
召出されきるよ。加尚うとの如く奇術を伝く。廣玄しられど
信玄感るる招よて。近く其術を試べれの方。扣ゆ作出され
きるよ。加尚数面承平伏して膝退時。信玄土屋平八郎よ問ふ
丑けまば。土屋手意を得て。加尚が奏者よ附て。屋よ下よ処と
能ふて扱ふよ。加尚と対面とぞ。見古今集絵
失よ懲し。隠義が悪貌を西速よ切持られしと聞えし。
されば甲越二将人物ふる事毫重も遠ぶりくりと。諸人舌を

巻てぞ恐怖きるとる。寔思術の奇ある事。顕明の外よ詳細
虚よ入實外窺て軍慮を助よと。森こる美戦の俺嶽
兎責の陣。出入自在陽の通。兵と用ゆるよ知て。最一流の要路。事
皆軍忠よ因。然ども。竊盗姦通よ用まば。益二の悪術ふり。故よ
受授の間必條々の厳戒乃ち。加尚が如きの環よ言術を求
の貪欲よ産て。遂よ身を亡すよ至る。又八物が如きの猴よ
徴ふ知と。他の賞誉を妨。却而幻術のみよ新蔓の
元帯よ比せ。まて首と為ふ。猴よ却而愚ふりと
ぞ。人を惑ざらん乎

繪本烈戰功記卷之十畢

汲清